
俺がお前を殺すから

冬道 ナオト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺がお前を殺すから

【Zコード】

Z8304Z

【作者名】

冬道 ナオト

【あらすじ】

二人の殺し屋の物語。

死んでもなお、繋がり続ける絆とはなにか？
永遠に終わらない二人の戦いを描く

序章（前書き）

残酷な描写や、若干の性描写等が含まれます。

？？？殺し屋としての人生。

18年間……長かったような短かったような……

俺、弑朗しゆろうは自らの人生を振り返っている最中だつた。
仕事でしくじり、腹部に刺し傷……致命傷だ。
もう血が止まらない。

「弑朗……」

俺の側に佇む女……殺し屋仲間の朔夜さくやだ。

そういうえばこいつにも随分世話になつたものだ……
殺し屋の仕事を紹介してくれたのもこいつだつた。

「最期だ……なにか望みはあるか？」

「タバコ……」

「……？お前つてタバコ吸う奴だつたか？」

「……一度も吸つたことはねえよ。ただ……どうせ死ぬなら経験し
とこいつと思ってな」

渾身のジョークのつもりだつたが、朔夜は重々しく頷き、タバコの
自販機を探しに行つた。

あれ……マジにとりやがつたぞアイツ。

頭が冷たくなつていき、逆に服の中が温かい液体で満たされていく
のが分かる。

散々人間の命を奪つてきた俺だが、自分の死というのは初体験だ。
手元の拳銃に目をやる。

？？？？？このまま出血多量で死ぬのと、拳銃で頭を撃ち抜いて死ぬのと、どっちが苦しいだろうか？

どうせ死なんだ……ラクして死ぬよりも最期まで苦しみといつ生を感じていたいものだ。

朔夜の刀で斬つても、うつってのも面白そうだ。

「いてつ」

俺の頭にタバコの箱が投げつけられる。

「吸え」

早いな朔夜。

俺は無言でタバコの箱を破り、タバコを一本取り出す。くわえ、ライターで火をつける。

「…………けみい…………」

これが俺の最期の言葉となつた。

？？？？？57年後、西暦2012年2月9日。

「へ」やつ

頭蓋骨が砕ける感触がした。

俺は念のためもう一度鉄棒を振り下ろし、男の人生を終わらせる。
？？？「任務完了」、窓を蹴破り脱出する。

「お疲れ紫朗」

相棒の朔矢さくやが物陰から飛び出す。

「お前なにやつてたんだよ」

「へつ」

朔矢の腕の中には何やら小さな箱の様なものが。

「また盗んだのか」

「殺しだけじゃ食つていけないんだから仕方ないでしょ」

……ちつ……

？？？？？黒い時計塔。

朔矢を近くの喫茶に置き去り、壁面を伝つて最上階の一室へと向かう。

「報酬だ」

黒ずくめの人間から受け取つた紙袋の中身は札束。

50つてところか。

不景気だな。

俺は無言で踵を返すと再び壁面を伝つて時計塔を降り、朔矢の待つ

喫茶へと向かう。

街の街頭が眩しい。

雑踏が耳障りだ。

世間はクリスマスか。

血色の衣装を纏い、ケーキを売るあの男は何を考えているのだろうか。

クリスマス……か。

朔矢は喫茶でケーキを食べていた。

全身黒色のタイツに黒色の衣を纏う朔矢は浮ついた喫茶店には不釣り合いだな。

泥だらけの顔をほこりっぽせながら、実につまそうに食いやがる。

俺は向かいの座席に座り、ミネラルウォーターを注文する。

「はあ？ あんた何でクリスマスの喫茶店でそんなものしか頼まないのよ？」

「知らない訳じゃないだろ……。俺は水以外は飲めん

「飲めないんじゃなくて飲まないだけでしょ！ ちょっと店員さん」

朔矢は勝手にコーヒーとチーズケーキを注文する。

こんな深夜に俺にコーヒーを飲ませて寝不足にでもさせらる気か。

殺し屋にとつて体調不良は死に直結する。

寝不足で仕事などもつてのほかだ。

「俺は飲まねーぞ」

「飲みなさい」

「いや……飲まねーって」

「飲みなさい」

「だから……」

「飲・み・な・さ・い」

「……………」

「はい」

俺は運ばれてきたチーズケーキをつつきながら渋々「コーヒーを口にする。

「…………苦」

「お子様」

いらっしゃ

俺は「コーヒーを一気飲みし、舌を火傷した。

地下街、とある一角のスペースに俺たちのねぐらがある。

小さな本屋の中の端、床を剥がし、梯子を下りた先、六畳の小さな

小部屋。

?????そこが俺と朔矢の部屋だ。

「今日は50万だ」

「不景気ね」

俺と同じつつこみを朔矢はして、ターゲットの屋敷から盗った宝石を取り出す。

「明日闇市で換金するわ。まあ100万にはなるでしょ」

> 37755 — 4725 <

「合わせて150万か……」

「贅沢言わない」

朔矢は手際よく布団を敷き、寝転がる。

「さつさと寝なよ」

「お前のせいで眠くねえんだよ」

「私何かしたつけ?」

「…………」

「コーヒーなど飲んだのは3年ぶりくらいか…
カフェインがギンギン効いてやがる。」

俺も布団を敷き、その上にあぐらをかく。

眠くなんてならない。

テレビの類は一切無い。

俺は拳銃とナイフを取り出し、手入れを開始する。
何もすることが無いとき、趣味と呼べるもののが無い俺にとつて武器
の手入れ以外にすることは無い。

朔矢はもう寝入ったようだ。

なんて憎たらしい寝顔だ。

「…………」

しばらく朔矢の寝顔を眺めていた俺だが、ふと、朔矢に会った頃
のことを思い出す。

『俺がお前を殺すから、お前も俺を殺してくれ』

寝るか。

俺は布団に潜り込む。

この日は寝付くのに2時間かかった。

序章（後書き）

連載開始します。
作者冬休みにつき、期間限定で毎日更新しますね

「起きなさい紫郎」

朝か。

外の光が差し込まないここでは時間感覚が狂う……素早く着替え、梯子を伝つて上の本屋へと出る。

本屋のおっちゃん（に偽装した情報屋のおっちゃん）が開店の準備をしてる。

「ああん」

おっさんから小さな鞄を持渡される。

開封中の紙を読む。

依賴狀
紫朗殿

暗号文か。

俺は素早く解読し、ライターで紙を燃やす。
要は『山田太助』を殺せばいいんだろう?
一緒に入っていた『眞に田をやる』。

初老の男だ。

「仕事?」

「ああ」

俺は上がってきた朔矢に『眞を見せる』。

「こいつで200人目だね」

「ん? 何がだよ」

「あんたと仕事を始めてから殺つた数

そーなのか。

いちいち数を数えてるのかこいつは。

「まあ……もう一年だからな」

俺たちは情報屋からターゲットの居場所を教えてもらい、地下街から出る。

とりあえず昼間のうちに下見を済ませ、夜に殺る。

都心の超高層マンション、その最上階に山田太助は居る。

「建物」と潰しちゃおうよ

「物騒なこと言つな」

セキュリティーがきつすぎて潜入は無理そうだ。

となると狙撃しかないか……？

「あんたはいいよねー。いろんな武器が使えるで」

朔矢が腰に差した日本刀を撫でながら言つ。

「ここの時代に刀しか使えない殺し屋なんてお前だけだよ」

武器屋に狙撃銃の借用を頼み、俺たちは昼食にすることにした。

「ラーメンでいいか?」

「えー」

「えーじゃねーよ」

刀を隠す為に黒装束で身を包んでいる朔矢は町中では浮きすぎるので、俺はウインドブレーカーだが、全身に暗器を仕込んでいるためあまり一般人との接触は避けたい。

徒歩で郊外のさびれたラーメン屋に入り、俺は味噌、朔矢は醤油を注文する。

「ねえ」

「あ?」

「首斬られるのと腹斬られるのってどっちがいい?」

「どっちも嫌だ」

「いいから」

「…………首」

なんてこと聞くんだこいつは。

「ふーん」

だからどうとも言わず、朔矢は運ばれてきた醤油ラーメンに取りかかる。

ホント可愛い奴だ。

深夜0時。

狙撃銃を構え、俺はただターゲットが姿を現すのを待つ。

「さむ……」

12月……寒いのは当然か。

しかし山田太助は出て来ない。

さつさと姿見せろや。

奴の部屋の窓までの距離は300メートル、ほぼ無風……余裕だ。むしろ心配なのは……

俺は後ろをチラ見する。

やること無くてヒマを持って余した朔矢が階段を降りていいくのが映つた。

アイツが刀を持って街をうろつくことの危険性は充分に理解していったが、今は仕事が優先だ。

それにアイツももう16……分別は出来るだろ？

やれやれ……

深夜1時。

ようやくターゲットの影がちらちら見えてきた。

集中。

話によれば奴は過激派右翼……物騒な武器や部下を抱えてるらしい。一撃で仕留めないと面倒なことになりそうだ。

「?????死ねよ」

特に理由はない。

金が欲しい訳でもない。

なんとなく、無意味に、惰性に、他人の死を願い、殺す。

殺す。

命の価値なんて知らない。

価値なんてない。

認めない。

殺す。

死ねよ。

命に上下は無い。

俺もいつか死ぬ。

だから平等だろ？

そこに罪は無く、罰も無い。

誰も咎めず、誰も裁かぬ。

スコープの十字線が山田太助の頭を捉える。

ばしゅつ

撃ち出された弾丸は山田太助の頭部めがけて最短距離を突き進む。強化ガラスを貫通、そして、髪の毛、肉、骨を貫通し、床にめり込んで停止する。

「完了」

素早く銃を解体し、撤退…………。

バゴンツ　という音とともに爆風が俺を襲う。
マシンガンの弾の雨が降り注ぐ。

ああそうだな。

出来すぎた世界だ。

.....

やられた……

右腕に一発、左足に一発、脇腹に刀傷。
代わりに34人を終わらせた。

乱闘の最中に遅れて到着した朔矢とバトンタッチして、避難した。
あの場に残つても足手まといでしかないからな。

久々だこんな失策は。

俺があそこでさつさと逃げてりや……

とりあえず止血完了、なんとか命は失わずに済みそつだ。

「紫朗」

「おう、朔……」

左腕が根元から無い上、右の太ももが抉れている。

全身に切傷、弾痕……

朔矢の血と返り血とで、全身血色に染まっている。

一目で理解する……手遅れだ。

「……」

「……」

お互い、何も言わない。

ただ何となく、ボーッと立り尽くす。
3分くらい経つただろうか？

朔矢の足下は血の溜まりが出来ていた。

そこに罪は無い

罰も無く

誰も咎めず

誰も裁かぬ

俺は拳銃を抜く。

同時に、朔矢も刀を抜く。

その刀身は血糊で赤く光る。

「そんなんで斬れんのか？」

「……私を誰だと思っているの？」

「……そうだったな」

俺は歩み寄り、朔矢の間合いに入る。

言葉は交わさない。

無意味だとお互いが理解してるからだ。

ざしゅつ

朔矢の刀が俺の右肩から左腹部にかけて袈裟に斬る。
狙いは肺か……相変わらずえぐい奴だ。

俺は拳銃を構え、撃ち、心臓を撃ち抜く。

「またな」

これが俺の最期の言葉となつた。

36年後。

西暦2048年。

第三次世界大戦は佳境を迎へ、追い込まれた西側の国々は最終兵器を使用、人類の築いてきた叡智を以てその文明を滅ぼした。大部分の大地は海に没し、僅かに残つた土地は汚染された。

世界人口10万人弱、平均寿命21歳、赤子死亡率89%という地

獄の惑星へと変遷したのだ。

名も無い荒野、一人の男が歩いている
黒い襪襪布に身を包み、腰には剣
その刀身は血鎧で不気味に輝く

> 3 3 7 8 3 2 — 4 7 2 5 <

その名はシロー

氣づけばそう呼ばれていた

齡十六にして戦千。

その手は千の命を吸い

未だに不敗

死を知らず

生を望む

死を与える

生を得る

そこに罪は無い

罰も無く

誰も咎めず

誰も裁かぬ

名も無い荒野、一人の女が歩いている
黒い襪襷布に身を包み、腰には剣
その刀身は血鎧で不気味に輝く

歩みの先には一人の男

その出会いは必然

必定であり

運命である

一章 変遷（後書き）

ようやく本番です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8304z/>

俺がお前を殺すから

2011年12月27日19時53分発行